

## 【2026 ワールドカップ・ミラノ大会 3日目】

開催日：2026年7月10日～12日

開催地：イタリア・ミラノ

### 【団体】

〈種目別決勝：フープ・クラブ〉 8位

得点：23.900（D12.0／A7.0／E4.9）

大会最終日、日本は種目別決勝フープ・クラブのみに出場した。今大会を通じてチームの目標は一貫して「自分たちの演技を最後までやり切ること」であり、決勝においても自分たちの演技だけに集中することを改めて確認し、試合に臨んだ。

しかし、総合競技を終え、世界トップレベルのチームと順位や得点を競う中で、選手それぞれの心理には少なからず変化が生じていた。試合直前の練習では、世界各国の完成度の高い演技や気迫あふれる演技を目の当たりにし、「世界の強豪国に負けたくない」という思いが強くなった選手、対戦相手を意識するあまり平常心を保ち切れなかった選手、自身の演技への不安が先行した選手など、その表れ方はさまざまであった。

互いに「自分たちの演技に集中しよう」と声を掛け合っていたものの、フロアへ立つ瞬間にチーム全員の意識を完全に一つへまとめることはできなかった。

演技では、冒頭のコラボレーション（CR）において投げに乱れが生じ落下が発生した。さらに、その直後のステップへの入りが遅れたため、ダイナミックチェンジを含む芸術面でも大きな減点につながった。その後は冷静に対応し、大きな崩れなく演技を進めることができたものの、後半の3つ目の交換で再びクラブを落下し、続く複数投げも成立させることができず、連続した失点となった。

試合では、心理的な揺れがわずかな迷いや判断の遅れとなって現れ、それが技術の精度や演技全体へと影響を及ぼした。どのような状況でも技術を再現できてこそ、本当の意味で世界で戦える技術である。

精神状態によって精度が左右されるうちは、まだ技術の再現性が十分とは言えず、世界で安定して戦うためにはさらなる積み重ねが必要であることを改めて実感した。

また、今大会を通じて、世界上位国は連戦の中でも高い安定性を維持し、試合を重ねるごとに演技の完成度を高めていた。

一方、日本は依然として練習段階から演技の安定性に課題を残しており、想定外の状況への対応力や技に対する許容範囲も十分とは言えなかった。さらに、身体の緩さは投げ受けの精度や安定性にも影響しており、フィジカル面を含めた基礎力の向上も不可欠である。

今回経験した世界トップレベルの舞台での緊張感やプレッシャーは、実際にその場で戦い、一つひとつの修羅場を乗り越えることでしか得られない貴重な経験である。現時点では世界上位との差はあるものの、この経験を糧に技術・判断力・精神面のすべてにおいて再現性を高め、世界選手権ではどのような状況でも自分たちの演技を最後までやり切れるチームを目指して強化を進めていきたい。

**【出場選手】**

田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、田邊観世埜